

Title	1950年代伝統論争における和風建築批判と反論 : 吉田五十八の事例に着目して
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 70 P. 35-P. 48
Issue Date	2017-07-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/65048
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

1950年代伝統論争における和風建築批判と反論 — 吉田五十八の事例に着目して —

羽 藤 広 輔

キーワード

吉田五十八, 伝統論争, 和風建築, 設計要旨

Isoya Yoshida, Dispute about Tradition, Japanese-style architecture, Descriptions of architectural works

1. はじめに
2. 1950年代伝統論争における和風建築批判と既往論考
3. 1950年代前半の吉田の伝統観
4. 1950年代後半の吉田の伝統観
5. おわりに

1. はじめに

1950年代の建築界における伝統論争は、主に、川添登（1926-2015）が編集長を務めた『新建築』誌上で、丹下健三（1913-2005）などの建築家達が、伝統と創造の問題についてそれぞれの主張を展開したものであり、その中で和風建築、特に数寄屋建築に対する批判が多数見られた。池辺陽（1920-1979）の論考「和風建築と現代のデザイン」¹（1955.6/以下、「池辺論文」と表記）は、その代表的な例と言える。しかしながら、後の同論争の総括のされ方を見ると、丹下の言説や作品、及び、白井晟一（1905-1983）によって提示された縄文・弥生の対比による伝統理解の構図等に焦点を絞ったものが多く、和風建築批判の実態については、堀口捨己（1895-1984）設計の「サンパウロ日本館」（1955）に関する論争を除いて、ほとんど触れられていないのが現状である²。

したがって本研究では、同論争における和風建築批判の内容を概観した上で、それに対する和風を手がけた建築家、特に吉田五十八（1894-1974）の反論と、同時期の吉田の伝統観の内容を明らかにする。研究の対象とする資料は、表1に示すエッセー、対談記事、設計要旨といった1950年代（1950.1~1959.12）の吉田の著作とし、池辺論文が発表された1955年6月を一つの時期的境目と捉えながら、吉田の主張の内容や変遷について考察を行う。

本稿は第58回大会（2016年7月31日、於：京都精華大学）での発表に基づく。

表1 1950年代吉田五十八著作リスト

年	月	日	刊名	種別	題
1	1950	1	-	建築文化	対談記事 最近の建築を語る(1)
2	1950	2	-	建築文化	対談記事 最近の建築を語る(2)
3	1950	1	-	建築美術	対談記事 絵画と生活文化
4	1950	3	-	建築文化	設計要旨 歌舞伎座の意匠に就いて
5	1950	6	-	国際建築	設計要旨 歌舞伎座
6	1950	9	10	「新築」松原肇	エッセー 絵と地鳴舞
7	1950	11	-	国際建築	設計要旨 新喜楽(京道)・東京聖地
8	1950	11	20	「Le chiu Takashimaya」	エッセー たたみ
9	1950	12	-	国際建築	設計要旨 料亭金田中(京道)
10	1950	12	1	暮らしの手帖	エッセー すみこなし
11	1950	12	-	設計情報	設計要旨 新感覚の「建築美術展」
12	1950	1	-	国際建築	設計要旨 新日本感覚の建築-美術・工芸展の会
13	1950	2	-	新建築	設計要旨 新日本感覚の建築-美術・工芸展の会 設計要旨
14	1950	2	-	美術手帖	設計要旨 新日本感覚の建築-美術・工芸展の会について
15	1950	6	-	芸術新潮	設計要旨 梅原竜三郎 新画室紀行
16	1950	6	18	毎日新聞	エッセー 茶の間 妻木実
17	1950	9	-	国際建築	設計要旨 梅原竜三郎部アメリエ
18	1950	9	-	建築文化	設計要旨 梅原竜三郎画室
19	1950	9	-	新建築	梅原竜三郎の画室
20	1950	11	-	文芸春秋	エッセー 読まれた言のやま
21	1950	1	27	毎日新聞	エッセー 梅原竜三郎書室
22	1950	3	-	国際建築	対談記事 国際性・風土性・国民性 円卓討論
23	1950	5	-	「名建築一週 年記念プログラム」	エッセー 素人言は下克上
24	1950	5	1	「解放」	エッセー 鬼門語義
25	1950	11	-	国際建築	設計要旨 経緯家のすまじい東京参道
26	1950	1	-	国際建築	対談記事 現代に生きる日本建築の創造
27	1950	1	-	国際建築	設計要旨 つる星の広間-兵庫青年会館
28	1950	2	-	国際建築	設計要旨 「料亭」東京聖地
29	1950	6	-	芸術新潮	対談記事 座談会 日本建築
30	1950	7	-	婦人之友	対談記事 生活の美と心-住まいの方向を中心に
31	1950	7	-	国際建築	設計要旨 料亭「たん」大原官邸崎
32	1950	6	-	新建築	池田謙次
32	1950	7	25	毎日新聞	エッセー 茶の間 妻木と貞祐
33	1950	8	7	日本経済新聞	エッセー 妻・男・女
34	1950	10	1	日本経済新聞	エッセー 妻の美 千利休「持庵」(妙蓮庵)
35	1950	10	-	文芸春秋	エッセー 本懐堂
36	1950	10	-	芸術新潮	設計要旨 現代のすまじい真鍮武蔵邸 設計書
37	1950	11	-	国際建築	エッセー 伝統の本割から独自の本割へ
38	1950	12	16	日本経済新聞	エッセー 妻の美 小林知記「真の妻の袖舞子」
39	1950	-	-	「雑誌の語」	エッセー 建築と雑誌
40	1950	1	-	建築文化	設計要旨 ある小部
41	1950	4	-	建築文化	設計要旨 文庫座
42	1950	10	23	東京新聞	エッセー 私の美術鑑賞 安井雪太郎の「瀟湘溥風堂」
43	1950	11	-	芥菜往來	エッセー 藤原の芭蕉
44	1950	11	-	主婦之友	エッセー 建築の名工-住新三三さん
45	1950	1	-	国際建築	対談記事 どのような国立劇場を期待するか(座談会)
46	1950	1	-	国際建築	対談記事 どのように国立劇場を設計するか(座談会)
47	1950	2	-	国際建築	設計要旨 山形邸-東京
48	1950	4	28	週刊朝日	インタビュー ビュー 人物双曲線(8)新歌舞座通りとピロティ式建築
49	1950	5	-	国際建築	設計要旨 中村勘三郎邸
50	1950	6	-	新建築	設計要旨 中村勘三郎邸 日本画と異国建築を結ぶ
51	1950	8	-	国際建築	設計要旨 5邸
52	1950	8	-	新建築	設計要旨 7邸
53	1950	8	-	雑誌	対談記事 建築雑誌 長鳴の名人 その名は吉田五十八
54	1950	10	31	毎日新聞	エッセー 玉堂のしやれ
55	1950	10	-	朝日新聞53号	エッセー 素人と素人
56	1950	1	-	きょうと	エッセー 私を捉える京の女性の魅力
57	1950	1	-	雑誌	エッセー 玉堂先生の建築の軌
58	1950	1	-	婦人之友	エッセー 私の好きな色彩
59	1950	3	11	東京新聞	エッセー 建築に遡る平安朝
60	1950	6	-	国際建築	設計要旨 明治座
61	1950	7	-	近代建築	設計要旨 明治座 設計書として
62	1950	7	-	新建築	設計要旨 明治座
63	1950	5	20	建築雑誌	エッセー 平色の妙味
64	1950	6	-	建築文化	設計要旨 日本芸術院会館
65	1950	6	-	国際建築	設計要旨 日本芸術院会館
66	1950	7	-	新建築	設計要旨 日本芸術院会館
67	1950	7	-	建築文化	設計要旨 梅原竜三郎邸 設計書として
68	1950	7	-	国際建築	設計要旨 梅原竜三郎邸 設計書として
69	1950	7	-	新建築	設計要旨 梅原竜三郎邸
70	1950	8	10	婦人文化新聞	エッセー 建築と衣類の調和美
71	1950	9	-	国際建築	エッセー 尾崎記念会館 二階階級をかえりみて(対談)
72	1950	1	-	芥菜往來	エッセー 新春随想 下足
73	1950	5	-	建築文化	エッセー アンケート 建築家には希望がある-20年後の夢 回答"20年では..."
74	1950	8	2	週刊朝日	エッセー 帝國ホテルの山崎とこれに代りまして 一部でも保持したい建築
75	1950	12	20	週刊朝日	エッセー 異端視された伝統的新建築

2. 1950年代伝統論争における和風建築批判と既往論考

2-1 1940年代までの吉田の伝統観

吉田は、大正末期から昭和にかけての近代化の流れの中で、既存の数寄屋を改革し、新興数寄屋を創設した建築家として知られている。これについて吉田の基本的な考えが示されたのが1935年の「近代数寄屋住宅と明朗性」³と題された論考である。この中で吉田は、和風住宅の一般の天井、壁面は、柱、長押、天井竿縁など様々な部材によって仕切られた多数の平面から構成されており、数寄屋建築特有の「ウルササ」が存在するとし、これを排除して明朗性を高めるために、「(1) 内法上を大壁にする方法」、「(2) 天井を壁と同材にして、内法上の大壁とを連絡せしめ、之を一つの部面に見る方法」、「(3) 長押、附鴨居を見ず、(2)の方法に依

り天井から下りて来た大壁と一つに見る方法」を挙げ、具体的に図を示して説明している。大壁の採用については、防火構造の法規的要請が背景にあったが、吉田はこれを逆手にとり、大壁の壁面に見せたい部材だけを付ける方法によって、外観上、柱の秩序の拘束から解放された数寄屋を完成させたのである。こうした考えは、実際の建築設計においても実行された。1936年の「吉屋信子邸」について、「客間は中古の奈良、天平あたりの様式の中で近代性のある部分を抽出して、それに現在の新建築の気持ちを入れてデザインして見た。(中略)又部屋の内法を全部取除いたことは、従来の主張『数寄屋住宅の明朗性』に基くその理想の一端を表現したつもりである」⁴としている。

また、吉田は建築における「雰囲気」を重視した。「住宅は住む宅で、どこまでも見せる宅ではない。だから家人にとって住みいい家であり、又来る客が長く居られて家人と親しめる家であつて欲しい、日本人には日本特有の雰囲気がかもし出された家が本当にいい住宅であると思ふ」⁵とし、「由来建築は寸法は第二義で、気分と云ふか、雰囲気と云ふかそれを感じ得するのが第一義であらねばならない。殊に日本建築に於て然りである」⁶とも書いている。

さらに、吉田は日本の伝統的な住居のあり方を改革しようとし、住居においては家族の生活に即したものであるべきと考えていた。「私は、書院、床の間、違ひ棚を昔のままにしておくといふこの観念をやめなければ、日本建築は進歩も発展もないと思ふ」⁷とし、「茶の間はやっぱり茶の間ですから客間式に一間の床をつけるよりも、果物なり到来物なりを乗せる棚とか、小物を入れる整理棚を設ける方が合理的です。要するに見て呉れの形式美よりも、実用的で便利であることが生命なのです」⁸としている。

2-2 1950年代『新建築』誌にみる和風建築批判

1950年代伝統論争期において、最も明確に、同時代の建築家による和風建築を批判した事例として、前述の池辺論文が挙げられる。池辺は具体的事例として堀口と吉田の作品を例に挙げ、吉田について「要するにこの作品では日本的な形は完全に表面のアクセサリーのようなものになつており、技術はそれをつくりだすために使われており、技術自体の生命力を失つているのである。この方向を極論すれば、昭和初期の博物館や軍人会館様式などと同等の立場からでているといえよう」としている。続いて、池辺の主張は、趣味・再現の問題と、社会・技術の立場から展開される。前者について、和風建築は視覚的快適さを求めた趣味の芸術であると捉えた上で、「芸術は快よさの追究ではなく、人間の創造の行為である」と主張し、現代における建築家の古典再現者としての立場に一定の理解を示しつつも、「それは創造とは全く異なつた役割」とし、建築における「創造」を重視している。後者については、和風建築はそのままでは現代の生活に適合せず、「和風建築によつて支えられる生活は特殊な階級・生活にすぎ

ない。そのことはこれらの多くが現在料亭や旅館、一部の富裕階級のためにのみつくられていることから示されている」とし、民衆の視点から和風建築あり方を批判している。(本節ここまでの引用文はすべて池辺論文)

当時の和風建築批判の論旨を読み取る際に重要となるのが、この「民衆」の視座への共感⁹であると言えよう。建築評論家・浜口隆一(1916-1995)は、1956年の論考で「現代数寄屋に流れているのは“西洋”に対する民族主義的な抵抗意識、しかも民衆の生活感情に連帯した抵抗感といえることができるであろう。しかし、それと同時に、この民衆の生活へのつながりが、(中略)民衆のための住宅そのものとしてでもなく、また民衆の生活の貧しさを克服しようと実質的に努力するものとしてでもないということが、忘れられずに指摘されなければならない」¹⁰とし、さらに浜口はこれに先立ち1955年の論考では、花柳界と和風建築の関係について「やや飛躍的な言い方になるが、数寄屋建築・和風建築に対して、私は何となく“女”それも prostitute 的なものを感じる。もちろん和風建築と prostitute (水商売・花柳界 etc) との間に深い縁があることは誰でも知っていることである。料亭の建築はすべて和風である(もつとも和風建築のすべてが料亭というわけではないが)。現代の数寄屋建築の名手・吉田五十八教授の作品の多くは花柳界関係のものであり、堀口捨巳[ママ]博士のものにしても、やはりそうした色合いはある」¹¹と和風建築に対する複雑な心境を語っている。

また1950年代伝統論争で存在感を示した白井晟一は、自身の住宅作品「試作小住宅」発表の際に、「都市の木造小住宅も此の頃は防火地帯と否とにかかわらず、殆んど構造材はモルタルで塗りつぶされることが多い。そして日本瓦の屋根と聚楽色のリシン壁で、いわゆる近代数寄屋という様式が氾濫している。これらの建物にあつては、當然、十分な考慮を拂わなければならないインシュレーションや壁体内の通気には甚だ冷淡である。この様式は花柳狹巷にはよろしい。しかし健全なるべき階級の住宅までこの様式を逐うのは問題である」¹²と説明している。構法的な側面に言及しているが、その背景となっているのは、限られた者だけが享受する官能に媚びた文化への批判であり、民衆の健全な文化のあり方を重視している¹³。

以上のように、1950年代の和風建築批判、特に吉田五十八が展開した数寄屋建築への批判の論点は、再現としての性格が強いため建築の「創造」行為として認められないとする点と、限られた者だけが享受する文化であり、そこに「民衆」の存在が見当たらないとする点の、2点が主要なものとして挙げられ、後者がより強調される傾向にあったと考えられる。

2-3 「サンパウロ日本館」の論争

池辺論文では、堀口の「サンパウロ館」(1955)についても厳しい批判が展開されており、以降論争があった。池辺は同論文において、「現在のいわゆる和風建築は紙障子の使い方一つ

についても現代の建築家のその時代への屈服を示す以外の何ものでもない。(中略) そのもつとも悲劇的なものとして昨年ブラジルサン・パウロに建てられた堀口捨己氏の作品日本館をあげる事ができる」とし、「この作品には全く創造的なものがない。現代の時代の苦しみがかく反映されていない美しい亡霊のような感じを受けたのである。古典建築の創造の伝承ではなく、形の継承であり、せいぜい音楽における編曲的な意味以上の何ものも感ずることができなかった」とした。また「日本館は過去の日本ではなく、現代日本を代表しているものでなければならぬ」とし、「日本館にあらわれている材料、手法、全体の構成などが、現代日本のどんな施設に、どんな生活に生きているものか、ということに非常に疑問を持つのである」としている。

こうした批評に対し、堀口を擁護したのが、建築史家・木村徳国(1926-1984)の「現在における古典の意味」(1955.12)という論考であった。木村は、「私は、日本館を「美しい亡霊」とのみ見る池辺さんに、我が国に古典があるかを疑うものだ。僕らが古建築中の或るものを、近代建築家として古典と称するのは、それが古いからではない。由緒あるからでもない。それは現在の僕らに越えられぬ程の建築的魅力を持っているからである。若し将来、近代建築が古典を足下にも寄せつけないほど芸術的高みを示す時代が来れば、その時古典は、単に建築史学の資料に過ぎないものとなるのである。しかし古典をその芸術的高みにおいて容易くは越えられぬ現在、我が国の古典はその生命があり、古典的現代作品もその生命を有つのである。これは原曲編曲の問題であるより、古典の持つ魅力にうたれるかうたれぬかの、感受性の問題によりかかわるのであろう」¹⁴とし、これについては当の堀口も「木村徳国氏によつて、池辺氏の批評を打ち破つた論文が出て、私は励まされた」としている。

この一節を含み、堀口自身による反論が展開された論考が「数寄屋造と現代建築について」¹⁵(1956.1)である。冒頭で「今日、建築を意匠する立場のわれわれは、今さらそれを歴史様式として造ろうとは思わない。それは創作ではないからである。われわれは現代の数寄屋造を作りたいのである」とし、その姿勢を明確にする。さらに「目新しくないということの含みだつたら、まさにその通りである」としつつ、「障子を使うのは屈服であるが、窓幕を使うのは屈服でない」と池辺氏は思うのであろうか。私には建築意匠の創作とは、そんな事柄にあるのではなく、必要な面や線や量の組立の中に作り出される比例の世界、その比例のまとまりある空間の作り出しにあると思う。その世界の調和に障子がかかわる限りにおいてのみ顧みるだけである」と自身の建築観に基づきながら説明している。

2-4 既往論考について

吉田の新興数寄屋の特徴を端的に論じたものとして谷口吉郎の「吉田五十八」(1954)が挙

げられる。「木割を破ろうとして、大壁の構造を数寄屋に採用し、今までの古い型にはまった外観や室内を旧式なスタイルから解放して、新しい自由なコンポジションの美を吹きこんだのは、全く吉田さんの造型的才能による。言葉をかえれば、構造と仕上げを分離することにより、構造の絆から離脱して、仕上げの自由をつかんだのであった」¹⁶としている。

浜口隆一は1962年の論考¹⁷で、谷口の見解を「よ局的を射ている」と評価しつつ、吉田の「新興数寄屋」には二つの分裂した評価があったし、大工・棟梁たちからのものは暖かかったのに対し、日本建築界の正統派からのものは冷たかったとしている。その要因は吉田の作品にみる「シャム・コンストラクション（偽の構造）」の傾向によるものとしながら、吉田が芸術院会員となる等、芸術の世界で評価を高めたことや、コンクリート造が普及するようになり、木造建築の技能は、インテリア・デザインの問題として発揮されるような時代となり、評価の分裂した状況は、「雪どけ」をむかえたという。それとともに、吉田の建築が、インテリア・デザインへとその本質を変化させたことで、耽美的な陶酔に身を任せすぎる危険について指摘した。これについては、前節で見た浜口の和風建築批判の論旨と関連していよう。

吉田の伝統観について触れている論考として前野堯の「新しい日本建築を求めて」¹⁸が挙げられる。この中で前野は、吉田が1963年に建築学会大会で行った「建築の日本的ということ」と題した講演を取り上げ、主に次の2つの内容を紹介している。1点目は、日本的な表現をする際のコツとして「ディテールで日本的な表現をせず、プロポーションで雰囲気を出すこと」と説明している点であり、もう1点は「現代の日本的ということは、西洋に日本をうまく混ぜることである」としている点である。後者については、次のように説明している。「戦後になって昨今のように西洋建築に日本が混ざる時代を迎えたとしている。それが今日という「日本的」ということであり、その理由として、日本建築の明快さ、単純さ、合理的なこと、開放的であること、無装飾であること、日本のわび、さび、しぶさが西欧からみれば近代的な要素をもっていると評価されたのであろうと述べている。」また、吉田の大壁については、前掲の浜口論（1962）を参照しながら、「吉田は建築正統派の冷たい目をもものともせず、新しい日本建築の創造のために、次々とシャムコンストラクションをつくり出した。（中略）吉田には異端とか、本流などという感覚はなく、自らを信じ、独自の世界をつぎつぎと切り拓いていったのである」としている。

さらに、吉田の著作にみる「数寄屋」の意味を問うた研究として、竹田和史・河内浩志「建築家・吉田五十八の記述にみる「数寄屋」に関する基礎的研究」¹⁹と近藤康子「吉田五十八の建築思想における「数寄屋」についての一考察」²⁰がある。竹田・河内は、吉田が「数寄屋」について語る時、半分以上の頻度で「新しい」ことに着目しており、その内容は「雰囲氣的」要因と材料などの「物理的」要因に関するものが同等に表れているという。近藤は、「数寄

屋」への問いにおける吉田の主題は、形式に付随する「雰囲氣」であるとし、それは「人間によって具体的に体験されている空間から現われ出るものであり、「柔らかみ」と「品位」という2つの空間的性格の融合に見出される一つの調和のありようであった」と結論づけている。

以上のように、吉田については、「新興数寄屋」のあり方や伝統観の概要の紹介、著作にみる「数寄屋」観の究明が試みられているものの、1950年代伝統論争における和風建築批判との具体的な関連において、吉田の伝統観や反論はいまだ明らかにされておらず、本稿はそれを試みるものである。

3. 1950年代前半の吉田の伝統観

1950年1月から1955年6月の期間の吉田の伝統観について、エッセー・対談記事においては、〈プロポーションや独自の木割の重視〉、〈大壁建築の擁護〉、〈堀口らによる戦前からの伝統理解への同調〉、設計要旨においては、〈和洋混合の提案〉、〈伝統評価における現代性の重視〉、〈料亭建築の評価〉、また双方で、〈雰囲氣の重視〉の特徴が見られた。時系列に見て行こう。

1951年5月の「歌舞伎座」(写真1)の設計要旨では、「日本的ディテールをなるべく目に立たせないよう、邪魔にならないよう単純化して、劇場全體から来る雰圍氣によつて日本的な香りを高め、歌舞伎らしい柔い空氣の内に芝居を進めて行くと云つたような考えのもとに構想を練つたつもりである。要するにこの度の歌舞伎座は「細部より雰圍氣」をねらいとして設計を進めたわけである」(表1-4)とし、日本的な空間を捉える際の〈雰圍氣の重視〉の特徴が見られた。

続いて、同年11月のエッセーでも「極端なことを云えば、たたみ、障子がなくとも、十分に日本建築の味いは發揮出来るのである。それは、たたみ、障子、ふすま、庭園などに囲われているなかから、かもし出される一連の雰圍氣そのもので、必ずしも周囲の材料ばかりから来るものではないからである」(表1-8)としており、同様の主張が見られる。



写真1 「歌舞伎座」(1951)



写真2 「新日本感覚の建築・美術・工芸展示会」B室(1952)

1952年2月の「新日本感覚の 建築・美術・工芸展示会」(写真2)の設計要旨では、〈伝統評価における現代性の重視〉、〈和洋混合の提案〉の他、〈雰囲気重視〉の特徴も見られた。「日本は日本で古来より美の伝統を受継いで居るのである。その美の内には現代感覚とのつながりを持つ何物かが沢山に含まれて居る筈である。それから抽出した新しい感覚を基盤として更にものを考え得ることは山積して居るわけである。この山積して居る「和」に「洋」を結び付けることに於て、初めて新しい日本の感覚が生れ出る筈である」(表1-14)という箇所からは、伝統のものの中に現代性をみつけようとする姿勢が窺える他、新しい「日本的なもの」をつくる上で、「和」のものに「洋」のものをいかに結びつけるかが重視されていることが読み取れる。また、「この度の「新日本感覚」の展示会は、この「和」と「洋」との渾然一致とまで行かないまでも、出来るだけ結び付けて見たいとの意図のもとに同じ気持ちの人々が集って、或る「雰囲気」を作り出すべく努力を結集して出来上った集りである」(表1-14)とも書いており、「雰囲気」という語が強調されている。

1953年3月の討論では「私が大きいものを造る場合は日本的な感覚を木割——というとき古くきこえるけど——それで出す。ディテールでは日本的なものは決して出さん。木割で出し得るという自信を持っておりますが……」(表1-22)とし、ディテールではなく部材の比率を重視する考えが読み取れ、〈プロポーションや独自の木割の重視〉の特徴が見られる。また、対談相手の1人である丹下との間で、次のようなやり取りを行っており、〈大壁建築の擁護〉の主張が見られた。丹下が、似せもののディテールでかたまつた大壁の数寄屋に言及し、構造が壁に隠れていることの危険性を指摘したのに対し、吉田は「その危険性はあるでしょうね。しかし一応危険を冒さないと、先へ進めないですよ。そのつき進んだ先はどうなるかと訊かれると、それは私にもわからない。——しかし、その結果、何か別な日本的なもの、胚芽みたいなものが生れればいいですよ。前に云った通り一代先でも二代先でもいいんだが——そう云った風に私のやったことが動機になつて [ママ]、それがいつか不燃の建築としっかり結びついて、日本らしいコンクリートの形態が出来ればそれでいいんだ」(表1-22)としている。自身が展開してきた大壁の建築について、日本独自のコンクリート建築ができていくために必要なものであるとし、真壁のまま日本建築を発展させようとしても限界があるという考えが示されている。

1954年2月の「T料亭・東京築地」設計要旨では、〈料亭建築の評価〉の様子が見られ、注目される。1955年6月までの期間において、「新喜楽(改造)・東京築地」、「料亭金田中(改造)」、「つる屋の広間・兵庫県甲陽園」、「T料亭・東京築地」、「料亭 ほたん 大阪曾根崎」と、料亭に関わる作品が5件発表されており、増改築の仕事が多いという状況から、元のプランの悪さや天井高の低さ、予算などの悪条件にもかかわらず、なんとか建築にまとめたという

主旨の説明に終始している点が共通していた。一方、「T料亭・東京築地」の設計要旨では「近頃の料亭は戦前のそれと違って、料理法がとみに発達したため、その競争点が料理そのものより、建物に移行した観が多分にある（中略）建築の上手下手が直接に経営面に響いて来るのである」（表1-28）とし、料亭の建築を、建築家の腕が試される好課題であるとの認識を示している。

1954年6月の対談では〈プロポーシオンや独自の木割の重視〉の特徴が見られ、「桂離宮」に話題が及ぶと「私はいつでもそう思うのだけれども、床があれだけ高いでしょう。にもかかわらず、軒の出が割合に少いですね。あれはどういうわけだろう。プロポーシオンからいうと、もう少し軒が出た方が、形がいいと思う」（表1-29）とし、プロポーシオンの観点から、軒の出等を批評している。

1954年7月のエッセーでは、日本建築における規格の存在を評価する言説も見られた。「日本建築で世界に誇り得る特色として上げられるものの一つは、三尺と六尺という標準規格をもっていることでしょう。（中略）こういう規格統一のある普請は日本以外のどの國にもなく、世界の建築界の問題ともなり、日本建築のすぐれた特色として羨まれております」（表1-30）としており、〈堀口らによる戦前からの伝統理解への同調〉の様子として理解できる²¹。

4. 1950年代後半の吉田の伝統観

1955年7月から1959年12月の期間の吉田の伝統観について、エッセー・対談記事においては、〈料亭建築への懐疑〉、〈プロポーシオンや独自の木割の重視〉、〈民衆への言及〉、設計要旨においては、〈和洋混合の提案〉、〈伝統的住居の改革〉、また双方で、〈雰囲気重視〉、〈伝統評価における現代性の重視〉の特徴が見られた。時系列に見て行こう。

1955年8月のエッセーは、1950年代伝統論争における、「民衆」の存在を重視した和風建築批判の論調を、はじめて意識して書いた文章だと考えられ、〈料亭建築への懐疑〉の様子が窺える。「畳は男の人と、女の人とどっちが好きであろうか、世にも奇妙な推理から考えて見よう。戦後の近代住宅は戦前の家から見れば、たしかに畳の数が減っている。ところが一方戦後の料亭は逆に畳の家がふえている。しかもそれが、おもに男が出入りするところに畳が多いということである。そして前に記した畳の減った近代住宅に、時間的にいって誰が一番長い間その家の内で暮しているかといえば、主婦と子供である。この二つの事実をにらみ合わせて考えてみると、大体において女の人より、男の人の方が畳が好きらしいということになる。しかし、これは男の人の方が、日本人の本来の面目に立帰るのが、女の人より早いという結論にしておく方が万事無事であるかもしれない」（表1-33）とし、独自の切り口で話題が展開され、花柳界とのつながり等を意識した形で料亭建築のあり方に言及しているが、それに対する明確な

主張はなく、結果としては、茶化した態度のみが浮き彫りになっていると言える。

同年10月のエッセーでは、待庵についての所感が述べられた。「二畳の茶席、一畳の次の間、一畳の勝手、都合四畳のこの茶室は、その単純性と合理性とが、現代の最小限住宅をよく彷彿（ほうふつ）させ、またその使い勝手の巧緻さも、さすが後世の茶道の隆盛をしのぶに十分である」（表1-34）と説明し、〈伝統評価における現代性の重視〉の言説が見られる。

さらに同年11月のエッセーでは、〈プロポーシオンや独自の木割の重視〉の特徴が見られた。「近来の新しい日本建築には、稍ともすると木割の無知から来る破綻が非常に多いことを見受ける。納まりの悪さは勿論、その作品の格調、落付、統一等の欠除している点は、殆んど昔の木割の習得の不足から来るものと断ぜざるを得ない。この破綻を克服するには、昔ながらの木割の原則に準拠した自分自身の木割を創作すること、即ち、伝統の木割から新しい独自の木割を生み出すことである」（表1-37）とし、1950年代前半までの主張と同様に、プロポーシオンを重視した考え方が、ここでは「木割」との関連の中で語られており、自分自身の、独自の「木割」を生み出すことの重要性が語られている。

『国際建築』1957年1月号の座談会では、「民衆」という言葉が使われたことが、注目される。「国立劇場……一体国立劇場という言葉そのものが、妙に貴族的な響が耳にさわって、王室、或いは皇室を中心とする劇場といった非常にいかめしいような、民衆と遊離したように聞こえる」（表1-45）としている²²。

続いて、同じ『国際建築』に掲載された「どのように国立劇場を設計するか」と題された座談会では、次のようなやり取りがなされた。歌舞伎が演目の中心となる、国立劇場のスタイルについて、ヨーロッパのバレエやオペラが、近代的な劇場の中で行われてもおかしくないことを、丹下らが指摘したのに対し、吉田は「それは私もそう思いますが、しかし民衆の観客層というものを全然無視することは出来ないと思う。民衆の全然ついて来ない国民劇場——これは困ると思う。民衆のための国立劇場である以上、観客という相手を考えないわけには行かない」（表1-46）とし、その指摘をかわそうとするが、その内容は説得力に欠けており、「民衆」という語の扱い方も表層的なもの留まっていたと言える。

1957年6月の「中村勘三郎邸」の設計要旨では、「日本の民芸調の家と、英国の中世紀風の家とは、その郷土的の匂い、煤色の感触、その野暮さの味、木割のごつさ……など、いろいろの点で東西の民芸が、どこかで、じっくりした一致点をもっているに違いない。これを一軒の家にとめて見たら、なにか面白いものが出来るのではないか、といったような、ほんやりとした夢を前々から抱いていた」（表1-50）とし、〈和洋混合の提案〉について説明されている。

同年8月の「S邸」（写真3）の設計要旨では、「私の永い懸案であり、また希望でもあった、

和風建築から鴨居を追放することに一応満足の解答を得たことである。これは天井の化粧目地を鴨居の溝に利用して解決したもので、間仕切欄間が、襖と共に移動することは、色々の意味合から、将来利用し得る点が多々あると思うのである。ただし「鴨居の追放」は将来に残された興味ある、しかも重要な、問題であろう」（表1-52）とし、〈伝統的住居の改革〉が主張された例と言える。

続いて、1958年3月のエッセー「建築に盛る平安朝」は、本稿で取り上げた資料の中では、伝統論争における和風建築批判に、最も、正面から応じた内容になっていると言える。「どうして私の仕事が平安朝を主調にしているかという、いままで飛鳥、奈良、平安、足利という工合にずっと調べてくると、平安朝にいちばん近代味があるんですよ。万事が今の人にぴったりするんですよ。平安朝は寝殿のように主に住宅建築が中心なのに、ほかの時代はみんな寺ばかりで生活に関係がないでしょう。だから、いまために奈良、京都を片っぱしに歩いてごらん下さい。法隆寺なんかのお寺にしたってやっぱり異国調だ、支那朝鮮が勝っている。そこにいくと平安朝は本当に日本人ですよ。京都御所が何んていったっていちばんいい、平安時代に日本のいいものが純粹に育っているし、生活も最も楽しんだんじゃないかな」（表1-59）としており、〈伝統評価における現代性の重視〉の特徴が見られる²³。

また、同エッセーでは、「私の仕事はよく日本の情緒主義とか、ふん囲気主義とか言われるけれども、しかし情緒やふん囲気のないものなんて仕様がないじゃないか、ねえ。情緒もなけりゃあふん囲気もない住宅なんておよそつまらないもんですよ。それは料亭にしたって住宅にしたって必需品だからね、当然なけりゃあならんもんですよ。しかし、まあ住宅というのはなるべく淡々たるべきで、料亭の方は見せる目的があるから、そうはいかない」（表1-59）とも述べており、自身の仕事への批評に言及しつつ、吉田なりの語り口で反論している。

さらに同エッセーでは、料亭建築についても触れている。「その料亭は東京ではただひとつつきりしきゃやってません。ありゃあ手直しはやりましたよ、けれども人が思うほどやっていない。あとはあったとしたらそりゃみんなニセだ」（表1-59）とし、建築家にとって好課



写真3 「S邸」(1957)



写真4 「日本芸術院会館」(1958)

題であるとの認識を示していた1950年代前半の言説とは一転して、料亭建築の仕事はあまりやっていないとした²⁴。

同年7月の「明治座」の設計要旨では、「劇場内部は、私の年来の持論である劇場即社交場というたてまえから、その意匠色彩は、映画劇場と全く異った雰囲気をかもし出すように設計したつもりで、観客はその日その夜だけは、世の豪華さを一人でしょっているような、リッチな気持でいられるよう、でき得るかぎり設計に気を配った」（表1-62）とし、〈雰囲気重視〉に該当する説明が見られる。

さらに同年7月の「日本芸術院会館」（写真4）の設計要旨では、「この建物には平安朝時代の優雅、典麗の雰囲気を主調として、弘仁、藤原の面影を彷彿させ、さらにこれを近代の時代感覚によって、現代の姿に移向せしめることを意図した。従って建物は平家建を選び、これに配するに平安特有の中庭をもってし、さらにこの周囲に廻廊をめぐるして、平安朝を単的にし、しかも強力に表現したつもりである」（表1-66）と説明している。前述のエッセー「建築に盛る平安朝」との共通点が多く、「平安朝」の様式を取り上げながら、〈伝統評価における現代性の重視〉の傾向に基づいた形で、その意図を説明している。

5. おわりに

1950年代前半と後半で、共通して見られた吉田の主張の特徴は、2点挙げられる。1点目は、設計にあたって、「プロポーション」や独自の「木割」といった、比率に関する要素を重視し、それによって、空間全体の「雰囲気」の表現を意図する考え方であり、もう1点は、現代性や近代性の所在を、伝統のものや他の様式との融合の中に探そうとする考え方であった。前者については、1950年代伝統論争の文脈というよりは、自身が考案した大壁の建築に向けられた「シャムコンストラクション」批判をかわすための論理としての要素が強かったものと考えられる。

一方、吉田の主張において1950年代後半になって変化したのは、「民衆」への言及が見られた点、及び、それまで建築家の腕が試される好課題であるとの認識を示していた料亭建築について、一転して、あまりやっていると説明した点であり、当時の和風建築批判の影響を見て取ることができた。そうした中、和風建築批判の論調を踏まえた上での、吉田のまとまった考え方が示された言説が、1958年3月の「建築に盛る平安朝」であると言え、情緒のない建築などつまらないと主張しつつ、当時、新たに登場した縄文・弥生の対比による伝統理解のあり方に応ずるように、最も日本的なものとして「平安朝」を挙げ、これに一番「近代味」があるとした。著作において様々な日本の伝統を取り上げる吉田にあって、特に「平安朝」を強調した点は注目されよう。

以上のように、吉田は堀口のように、真正面から批判に反論しようとはしなかったが、当時の和風建築批判の論調に影響を受け、自らの言説を調整しつつ、「日本芸術院会館」という実作を伴った、「平安朝」という形で、独自の伝統観を示すに至ったと言えよう。

註

- 1 池辺陽「和風建築と現代のデザイン」『新建築』6月号，新建築社，1955，pp.66-69
- 2 「サンパウロ日本館」に関する論争を扱った論考として，藤岡洋保「サンパウロ日本館」『堀口捨己の「日本」——空間構成による美の世界』彰国社，1997，p.156や崔康熙「「サンパウロ日本館」をめぐる「論争」の意味——建築家・大江宏の言説に関する方法論的研究——」『日本建築学会計画系論文集』第533号，2002.3，pp.311-317が挙げられる。尚，1950年代伝統論争の概要については，拙稿「建築家・白井晟一の著作にみる伝統論」『日本建築学会計画系論文集』第80巻，第712号，2015.6，pp.1411-1418の第2章でまとめている。
- 3 吉田五十八「近代数寄屋住宅と明朗性」『建築と社会』10月号，日本建築協會，1935，pp.64-70
- 4 吉田五十八「吉屋さんの家」1936.6，『饒舌抄』新建築社，1980，pp.45-49
- 5 吉田五十八「饒舌抄」1934.4，『饒舌抄』新建築社，1980，pp.9-19
- 6 吉田五十八「続々 饒舌抄」1936.1，『饒舌抄』新建築社，1980，pp.28-37
- 7 同上
- 8 吉田五十八「家族中心の新提唱」1936.9.1，『饒舌抄』新建築社，1980，pp.50-51
- 9 「「民衆」の視座への共感」は，藤岡洋保「伝統論の歴史」『建築20世紀 Part2』新建築社，1991，pp.78-79において，1950年代伝統論争の特徴の1つとして指摘されている。
- 10 浜口隆一「内部の問題としての数寄屋——建築表現にみられる人間像についての覚書」『新建築』8月号，新建築社，1956，pp.57-59
- 11 浜口隆一「数寄屋建築——ある建築評論家の告白——」『新建築』6月号，新建築社，1955，pp.4-5
- 12 白井晟一「試作小住宅」『新建築』8月号，新建築社，1953，p.2
- 13 川添登は，浜口の主張と白井の主張を同種のものとして見ており，白井を論じた文章の中で，「和風建築と売春との縁の深さを感じた浜口隆一と同じ感情を，現代の和風建築の中にもった彼は，民家に中に「典型」を見出し，そして造り出したのが，極小屋・真壁風の乾式構造によるローコスト住宅である。」としている。岩田知夫（川添登のペンネーム）「伝統と民衆の発見をめざして」『新建築』7月号，新建築社，1956，pp.13-16
- 14 木村徳国「現在における古典の意味」『新建築』12月号，新建築社，1955，pp.80-81
- 15 堀口捨己「数寄屋造と現代建築について」『建築文化』1月号，彰国社，1956，pp.31-32
- 16 谷口吉郎「吉田五十八」1954.8，『谷口吉郎著作集 第三巻』淡交社，1981，pp.169-176
- 17 浜口隆一「吉田五十八」『現代のデザインをになう人々』工作社，1962，pp.179-192
- 18 前野堯「新しい日本建築を求めて」『吉田五十八建築展』新建築社，1993，pp.21-26

- 19 竹田和史・河内浩志「建築家・吉田五十八の記述にみる「数寄屋」に関する基礎的研究」『日本建築学会中国支部研究報告集』33, 2010.3, pp.921-1-921-4
- 20 近藤康子「吉田五十八の建築思想における「数寄屋」についての一考察」『日本建築学会近畿支部研究報告集計画系』53, 2013.5, pp.897-900
- 21 戦前からの伝統理解のあり方については藤岡洋保『表現者・堀口捨己 ― 総合芸術の探求 ―』中央公論美術出版, 2009, p.86を参考にした。
- 22 「文楽座」設計要旨（1956, 表1-41）においても「民衆」に類する存在への意識が見られる。「大阪の文楽の如き庶民を代表する劇場は、どこまでも町民的雰囲気に入れられ、事大主義であつてはならない。」
- 23 同エッセー（表1-59）では、冒頭で吉田自身の作品「明治座」と「芸術院会館」を挙げ、「平安朝」との関連が説明されており、前者については「場内は朱と金が基調で、これは平安朝の絵巻物、たとえば平家納経なんかと、もうひとつは能衣装の色、外はふたつの色で、正面は有職調、両わきは江戸歌舞伎のシンボルのような従来のナマコ壁にしておいた」としている。その他、「S邸」（1957）を題材にした1958年1月のエッセー（表1-58）でも「平安朝」に関する記述が見られる。「食堂は、抹茶風の雰囲気でもとめたもので、右に見える中柱風の構想は茶室の室内を暗示し、これに配する卓子は平安朝を偲ばせる。」
- 24 『現代日本建築家全集3 吉田五十八』三一書房, 1974に掲載された「吉田五十八作品年譜」によれば、1950年代前半とは対照的に、後半（1955.7～1959.12）の時期には、専門誌における料亭建築の発表は見られない。

図版出典

写真1：『国際建築』1951年6月号, 写真2：『国際建築』1952年1月号, 写真3：『新建築』1957年8月号, 写真4：『建築文化』1958年6月号